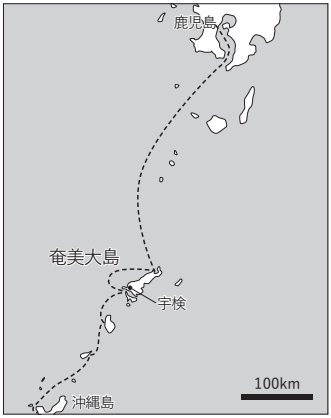
〈ルーツの島〉でコーヒー宿を開業

浅尾 朱美

南米エクアドルから奄美大島へ

奄美大島に移住する前は、国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊として南米のエクアドルで活動していました。二〇一四年九月に帰国し、海外での経験を還元できる仕事がしたいと考えている時にみつけたのが、地域おこし協力隊制度でした。

母方の祖父母が奄美大島の瀬戸内町出身で、幼少期から島の話をよく聞いていました。当時は「遠い南の島なんだな」というくらいの感覚でしたが、祖父母が他界し、自分が歳を重ねるにつれて自然と〈ルーツの島〉に惹かれるようになっていきました。「地域おこし協力隊をするのなら奄美大島で挑戦したい！」と思い、情報を探したところ宇検村のことを知りました。同村とエクアドルで活動していたチュキリバンバ村の人口が近かったこともあり、親近感を覚えたことも応募



奄美大島（あまみおおしま）

鹿児島から南に380kmにあり、佐渡島についで2番目に大きい離島。面積712.36km^2。亜熱帯海洋性の常夏の気候で、アマミノクロウサギなど固有の動植物や、マングローブなど豊かな自然に恵まれる。平安時代には、黒潮を舞台に独自の交易を展開していた。宇検村の人口は1,656人（2022年11月末現在）。

動機のひとつです。

十数名の応募者の中から私を含む三名が書類審査を通過し、面接へ進みました。私はこのときに初めて奄美大島を訪れ、面接なのか歓迎会なのか分からないほどアットホームな村役場の方々と出会いました。その結果、二〇一五年から宇検村初の地域おこし協力隊として、この地で暮らす機会をいただきました。

協力隊として経験した三つの苦労

任期中には、村の若者が島の未来について語り合う「若者会議」の企画と運営に取り組みました。着任したのが「宇検村まち・ひと・しごと創生推進計画」の策定年だったので、会議の開催を通して村の課題を明らかにし、若者世代の理想の未来などについてさまざまな意見の掘り起こしを行ないました。

役場の若手職員が積極的に会議の運営に関わり、四〇歳以下の村民を対象とした宇検村若者会議「やけうちフューチャーズ」をはじめ、そこから派生した集落でのマルシェや小学生を交えたワークショップの開催、ラジオ番組の放送、現在の学童保育の前身となる放課後児童クラブ「羽（はね）クラブ」を立ち上げる活動が生まれていきました。また、若者会議から生まれた「空き家改修チーム」では、のちに私が「とよひかり珈琲店」として開業する店舗（当時、空き家）の初期段階の改修に取り組みました。空き家活用の大変さを実体験できた貴重な機会となりました。

協力隊として活動した三年間を振り返ると、大きく分けて①行政の仕組みがわからない、②人間関係、③時間の使い方の三つの苦労があったように思います。①はおもに予算の組み方です。協力隊の活動費がどれくらいあって、何が対象事業なのか、どのように支出すればいいのかなどのお金の流れに関する知識がまったくなかったので、着任当初に研修などで学べる機会があれば、より効率的・効果的な活動ができた

筆者が経営する「とよひかり珈琲店」。

■とよひかり珈琲店｜14hikari coffee inn
鹿児島県大島郡宇検村湯湾716
電話：080-8371-4396
※宿の見学プラン（有料）もあり
詳しくは要問い合わせ

と思っています。②について、協力隊は役場内だけでなく、各集落や青年団、観光事業者など村内外の方々や各種団体との交流の場にお声かけいただく機会が多く、休みの日も活動の一環として誰かに会うような毎日でした。人脈が築けるという利点はありますが、浅く広く八方美人のような状態になり、結果として関係が疎遠になってしまう方もでき、塞ぎ込む時期もありました。③は、協力隊の業務と任期後も見据えての仕事づくりの両立に対する苦労です。行政から任された仕事をこなし、地域で関係性を築きながら任期終了後の仕事づくりを進めていくことは容易なことではなく、迫りくる期日に焦りを覚えることもありました。

「空き家改修チーム」とともに、大工仕事も経験した。

美味しいコーヒーが飲める宿

協力隊として島に赴任する以前から、私は「朝に美味しいコーヒーが飲める宿をやりたい」という想いを漠然と持っていましたが、それを周囲に話すことでさまざまなヒントや協力をいただきました。空き家を貸していただける方と出会い、任期中に地域の方々の力を借りながら空き家の改修作業を行なうことができました。また、休みの日にはコーヒーの焙煎を練習し、試飲などをしていただきながら、定住（起業）に向けた準備を進めることもできました。その結果が、任期三年目の途中、二〇一七年一一月の「とよひかり珈琲店」の創業

2021年に開業した宿泊施設「14hikari coffee inn」の内観。

として実を結んだと思います。

開業後五年という月日が流れる間に、結婚・出産・子育てという自分自身のライフステージにも変化が生じました。同時に、コロナ禍にありながら二〇二一年に珈琲店の物件をフルリノベーションして、一日一組限定の泊まれるコーヒーホテル「トヨヒカリコーヒーイン」を併設オープンし、私が想い描いていた宿を形にすることができました。

今後は、「誰もがほっとする日々を暮らすことができる、くつろぎある社会」という珈琲店のビジョンの実現を目指すべく、これに共感し、ともに活動をしてくれる仲間を探していきたいと考えています。■

受け入れ側からの言葉

一歩一歩、着実な前進に期待

宇検村は、奄美大島の南西部に位置し、深い入り江の焼内（やけうち）湾を取り囲むように14の集落から構成されています。奄美群島最高峰の湯湾（ゆわん）岳（694m）が隣接する大和村との境界に位置しており、その一帯に貴重な動植物の生息が確認されていることから、湯湾岳一帯の区域が2017年に国立公園として指定、2021年7月には「奄美大島・徳之島・沖縄北部及び西表島」として世界自然遺産の構成資産に登録されました。

一方、村内には人口減少と高齢化の影響で集落活動の維持が困難な地域も出てきており、村全体の問題として人材不足が顕著となっています。そのような中、2015年4月から地域おこし協力隊として村外の意欲ある人材を受け入れ、新たな支援・発想による地域資源などの魅力の再発見や活性化を図っています。

その第1号となったのが浅尾朱美さんです。行政側としても初めての受け入れで、まったくの手探り状態でした。募集要項には、特産品開発や観光業務、地域資源の発掘などと記載はしていましたが、具体的なミッションを与えないまま活動がスタートすることとなり、着任当初の彼女にはかなりの戸惑いがあったのではないかと想像します。

しかし、浅尾さんは持ち前の鋭い洞察力により、宇検村の課題や魅力を分析し、少しずつ行動を起こしていきました。彼女が行なった多くの活動の中でも特筆すべき取り組みは、若者会議の企画とそのサポートを行なう役場若手職員のチーム編成です。参加した多くの住民や役場職員に、「自分たちで村の未来を考え、進んでいくんだ」という気概が芽ばえ、実践につながったと感じています。私も彼女の意識や行動力に刺激を受けた者の1人です。

当時、私は広報係として村の広報誌を担当しており、彼女の活動を紹介するコーナーを設けました。彼女が好きな「歩」という漢字を使い、コーナー名を「一歩一歩。」としました。浅尾さん曰く、「歩には『少し止まる』が隠れている。歩くためには少し止まることも必要。でも、止まった後には、確実に歩くことができる」とのことです。

2年目、彼女の活動は生業づくりへとシフトし、3年目には「とよひかり珈琲店」をオープンしました。任期後には「14hikari coffee inn（トヨヒカリコーヒーイン）」という宿も開業しています。協力隊時代から現在に至るまで、一歩一歩、着実に歩みを進めている浅尾さん。今後もさらなる一歩に期待したいと思います。

（宇検村企画観光課　内田 健治）

浅尾 朱美（あさお あけみ）

大阪市出身。2015年に宇検村地域おこし協力隊として奄美大島に移住。現在は同村で自家焙煎の「とよひかり珈琲店」と、1日1組限定の泊まれるコーヒーホテル「14hikari coffee inn」を経営している。